

Urban Studies ジャーナルへの記事掲載

ローナンパディソン、バネッサワトソン
アーバンスタディーズ編集者

はじめに

研究者にとって主要な国際ジャーナルに記事が掲載されることは、アカデミックな地位を確立し学者同士のコミュニケーションをとる上で重要なルートとなった。今に始まった事ではないが、昨今ジャーナルへの掲載はより熱望されてきている。知識のグローバル化、研究と教育の力量をベースとした大学の世界ランキング、研究者のパフォーマンス測定結果が研究費獲得に及ぼす影響、（国によってはそれが研究費申請の条件であったりする。）それにより在職権や昇進が約束されたりと、これらの全てのことが主要国際ジャーナルに記事が掲載されることの重要性を強調している。またこれらのことが記事掲載の競争率を高めている。昨今主要ジャーナル、出版側に投稿されてくる記事が著しく増加しており、筆者にとって記事を掲載するというタスクがより煩雑化してきている。

これから著者になろうとしている人々のために提供されるこれらのガイダンスは、アーバンスタディーズに最近採用されたグローバルサウスストラテジーの結果である。このストラテジーはグローバルサウスにいるアーバンスタディーズ研究者、またはグローバルサウスのアーバンスタディーズについて研究している研究者が、ジャーナルに記事掲載を果たすための手助けをすることを目的としている。社会科学の分野では多くの主要ジャーナルはグローバルノースに位置しており、大多数の著者はこの地域の人達だ。Urban Studies も例に漏れず、殆どの成功した投稿は今もグローバルノースからきている。グローバルサウスストラテジーはこの状況に取り組むことを目的としている。編集者たちは急速化したグローバルサウスにおける都市化の重要性と、北と均等ではないものの、増加している南の国々のアーバンスタディーズ研究者、Urban Studies のようなジャーナルを通してより広範囲の聴衆に訴えようとしている研究者に目を向けている。

これらのガイダンスは特にグローバルサウスの学者のジャーナル掲載をサポートするためのものであるが、提供されているアドバイスはジャーナルに掲載を希望している全ての筆者に役立つものである。ウェブサイトでは英語で掲載されているが、このアドバイスはスペイン語、ポルトガル語、フランス語、アラビア語、ペルシャ語、中国語、日本語、ロシア語等、ここ数年に記事の投稿があった国のいくつかの主要言語に翻訳されている。

最後の前置きになるが、既に多くのウェブサイト、本、ジャーナルに「成功する記事の書き方」のハウツーが記載されているのに、なんで今更もうひとつ必要なのか？その答えは、ジャーナルにはそれぞれのスタイルがあるからだ。書き方のスタイルだけでなく、掲載しようとしている記事のタイプがそれぞれに違う。言い換えれば、ある特定のジャーナルに記事が掲載されるためのガイダンスは、それ自体がカスタムメイドでなければならない。

まず基本的なことから話を始める。その次に「インターナショナルなジャーナル」が何を意味するのかを解いていき、そして三つ目のセクションで質の高い記事の定義を探る。最後に投稿された記事の進捗、記事がファイナルアクセプトされるまでのプロセスを順に追って説明する。

基本事項

重要なスターティングポイントで、すでに著名なアーバンスタディーズ研究者でもリマインドされるべきレッスン。

最初に記事を書いてから送り先のジャーナルを探すな。記事に最もふさわしいジャーナルを選ぶことから始めよ。

当然のこのようだが重要なことである。アーバンジャーナルは多く存在する。それぞれがそれぞれのミッションステートメント、広意義でのスタイルをもっており、記事を書いている時にはこれらに敏感になることが重要である。

Urban Studies への記事掲載を希望するとしたら、まず検討すべきことは下記である。

記事がジャーナルの取り扱っているスコープ内であるかどうか。

アーバンスタディーズという学問には様々な解釈があり、また *Urban Studies* のようなジャーナルが記事を掲載する際には、特有の趣向があるのでこの点は熟考されなければならない。

顕著なクライテリアとして次の事があげられる。

記事がアーバンについて書かれている部分を沢山含んでいる事。

明らかなこのようだが、記事が部内で編集者に却下され、査読にまで辿りつかない理由は、しばしば取り上げられている内容がアーバン、またはある都市に関してではあるが、記事の内容が例えば環境や教育やその他に関して書かれていて、そもそもそれが研究の第一の目的だったりするからだ。このようなケースでは記事は環境ジャーナルやアーバン教育にフォーカスしているジャーナルに送られるべきである。

これは特に強調されるべき重要な点である。記事で取り上げた内容がただ都市について述べられているだけでなく、都市の特性について議論されているかどうか、自分に問い正して見るべきだ。社会的プロセスはしばしば都市でおきるが、必ずしもそれは都市のものとは限らない。アーバンエリアでの環境問題や紛争に関する記事でも、たまたまそれがアーバンエリアで起きただけで、焦点が環境問題に当てられているならば、その記事は *Urban Studies* のスコープから外れている。同様によくある不適切な投稿の例を二つあげると、アーバンデザイン、トランスポーターションにフォーカスしているところに投稿すべき多くの記事がジャーナルに投稿されてくる。

有効なガイドラインの一つは、いくつかの引用が *Urban Studies, International Journal of Urban and Regional Research, Urban Geography* 等のメインストリームのアーバンジャーナルからされているか、反対にどのくらいハウジングエコノミクス、トランスポーターション、アーバンデザイン等に言及しているか確認することである。

アーバンについて書かれた部分が十分にあるという条件を満たすには、アーバンの内容が付随的に書かれたのではなく、記事を書き上げる上で必要不可欠であるということだ。

どのように必要不可欠にするかは、後で質の高いアーバン記事の定義にフォーカスする際に記載する。再度ここでのポイントを強調すると、記事は主として我々が認識、理解している都市、アーバンセオリーやプロセスの認識、理解を発展させることにフォーカスしなければならない。

更なる基本事項

ジャーナルに慣れ親しむこと。

ジャーナルのミッションステートメントを理解するためにジャーナルのウェブサイトを訪れ、掲載されている記事のタイプとそのクオリティを理解するために、最近発行された版を読み漁ること。それにより自らが研究している同様な課題の記事や、どのように巧みに問題、事柄が書かれているか、どんな新しいディベートが始められたかを知ることができ、自分の記事が埋められるかも知れないギャップ、まだ書かれていない記事を見つけられるかもしれない。また編集者が厳密に守っている文章の長さ等のキーポイントに注目すること。

Urban Studies が自分の書こうとしている記事に適したジャーナルだと確認したら、どのカテゴリーに投稿するか決める必要がある。ジャーナルはいくつかのタイプの記事を掲載しており、最も多くは下記の通りである。

スタンダードな記事 — 質の高い、既存のセオリーをよく理解した上で書かれた、場合によっては実証的なケーススタディーに補完された記事で、本質的に概念的であったり、独創的なものも含まれる。このような記事はアブストラクト（要旨）、リファレンス、表、図を含め 8500 語を超えてはいけない。

スタンダード、通常記事以外のものを下記にあげる。

批判的論評 — これらはアーバンアカデミックコミュニティ内にてディベートのフォーラムを提供する。現代のアーバン状況に関する重要な事柄をとりあげ、理に適った議論に発展させ、とりわけその本質、政策についての論説、矛盾、問題がどのくらい政策で対応できるかについて解説できる筆者からの投稿を奨励する。批判的論評は通常新しい発見を提供することはあまりないが、説得力があり、パワフルで通常のアカデミック記事より形式ばらずに見解が述べられている。批判的論評は通常 4000 から 6000 語内であるべきだ。

ディベート記事 — これらは、アーバンスタディーズのキーエリアの現在のトレンドや発展を概略して評価する批評的レビュー記事で、都市や地域の既存文献を要約し、新鮮な見解、見識を提供することにより、それを更に展開させる。このような記事は現在進行中

の特定のコンセプト、トレンドやアーバンプロセス等のディベートに取り組むが、意義のある新しい見識や既存説を統合した論説を提供し、アーバンディベートを新しい分野へと拡大し、新しいアーバン現象についての新興論説を捉える。記事はアーバンリサーチ内の既存の見解、伝統への確固たる批評的協議を含めて 8000 から 10000 語であるべきだ。

これらのタイプの記事（それぞれの掲載例を含む）の更なる情報は、他の必須情報とともにジャーナルのウェブサイトの投稿ガイドラインに記載されている。

- <https://uk.sagepub.com/en-gb/eur/journal/urban-studies#submission-guidelines>.

インターナショナルジャーナルであることが何を意味するか

Urban Studies の読者が世界中にいるということが筆者に何を意味するか。いくつかは明確であるが、いずれにせよ重要である。

記事は世界中の読者に関係があり、彼らの興味のあるものでなければいけない。

記事全体が実証的ケーススタディーばかりで、その分野の様々な文献と全く関係づけられていないもの、理論的に展開されていないものは読者に興味をもたれにくい。もしそのような記事が例えば、ある都市の新しい公共交通網について書かれていたとしても、それによって発生するより大きな問題へと記事が発展していかないようであれば、世界の読者にアピールすることはできない。筆者は例えば、カンザスやボルドー、ナイロビにいる読者が読んだ際に、彼らに対して自分の記事がどんな価値があるのか自身に問い正してみなければいけない。

そして、それは下記を意味する。

記事は書いている内容の分野に関する現代理論的、または概念的の問題と関係しているものでなければならない。その議論は批評的に展開されなければいけない。

それは下記のことを強調する。

その記事が、書いている分野に対して新しい（概念的または理論的）見解を提供できていること。

記事の中で発展させた議論が、その分野で既に知られていることに対して、どのように新しい事を付け加えているか、またそれが確固たるもので重要だということを強調して示さなければいけない。

もし記事が実証ベースであるなら、下記のことを重要となる。

データ収集、解釈に使われた手段が確実なものであることを明確に示すこと。どのようにデータ収集が正確に行われたか、透明性をもって詳細に渡って示さなければ

いけない。結果を分析する際は、その手段を採用、選択した理由を説明して正当化しなければならない。記事が統計的手法を用いる際は、結果を正確に伝え、ジャーナルの統計的有意性ポリシーに従ったものでなくてはならない。

記事内で筆者が使った手法、正当性を明確に説明し、有り得る制約についても触れなくてはならない。しばしば必要な場合は手法、方法論について特別にひとつのセクションが割かれることもある。

ジャーナルが世界規模だということは更に下記の二つのことを意味する。

一つ目は、英語で書かれているジャーナルであるがゆえ、投稿される記事は英語の最低基準を満たし、構文は英語の文法に則って書かれていなければならない。もし筆者のうちに一人も英語のネイティブスピーカーがいないのであれば、英語のネイティブスピーカー、または英語が達者な人に丁寧にプルーフリードしてもらおうとお勧めする。査読してもらった後で問題箇所を修正すれば良いだろうという推測のもと、不適切な英語表現が含まれた記事を投稿するのは本人のためにならない。

ジャーナルが世界的であることにより派生する二つ目の意味は、記事掲載への競争が激しくなっていることに起因する。投稿数が増加しているということ、ジャーナルへの掲載には制限があるということは、発行が月刊であっても、他の著名な国際ジャーナルにと同様に、記事が頻繁にリジェクトされているということの意味する。多くは既に述べられた基準が満たされていない為、査読に送られずに編集者にリジェクトされている。通常これらはアーバンの内容が十分に書かれておらず、他のジャーナルに投稿されるべきものであったり、または、このセクションの初めにとりわけ強調したいくつかの必要な品質基準を満たしていないものである。

ここで役立つような統計がある。現在、2010年代後半における年間の総投稿数は1000件を超える。そのうち160くらいの記事が掲載に至る。下記に二つの点をあげる。

- この統計により投稿された記事のうち、最後の掲載にまで行きつくのはほんの少数だということが明らかである。もちろんこれにより投稿が差し控えられるべきではない。このような統計は世界的ジャーナルには通常のことであり、多くのリジェクト記事は、早い段階で編集長と他の編集者により、ここで説明されている基本的な条件（スコープ、オリジナリティー）が満たされていないためにリジェクトされている。投稿者にとっては残念だが、早期にリジェクトされることで別のジャーナルに再投稿することが可能となる。
- 重要な点は、ジャーナルが掲載可能な記事に期待することを満たした記事を投稿するよう心がけることだ。

質の高い記事を投稿すること

これまで投稿が成功するための基準を述べてきた。下記もそれに含まれる。

- 独自性、オリジナリティーがあること、その分野で新しい見解を提供すること。

- 既存の理論的、概念的、あるいは方法論的ディベートと関わりを持たせて書くこと。
- 実証的ケーススタディー、サーベイ等について書いているにせよ、掲載された論説、政策変換、または別の情報を引用して書いているにせよ、議論が確固とした証拠にどうやって裏付けされているかを示す、質的または量的な手法を明確にすること。
- 全体に首尾一貫とした構成で流暢、かつ明確に議論を展開させること。
- 話の内容と独自性にふさわしいアブストラクト（要旨）を書くこと。
- 書かれている内容を反映する、曖昧でない表題をつけること。それによりグーグルのような検索エンジンで発見される可能性が高まる。
- 記事の長さ、プレゼンテーションスタイル、同時投稿、盗用（本人のものでも既に他のジャーナルで発表済みのものを含む）について、ジャーナルが掲げた基本ルールを守る事。

質の高い投稿のその他の特徴

- 単に議論が理論的に書かれているだけでなく、問題とされている事象や、それを巡るディベートへの深い理解を読み手に伝えるために、批評的で理論的なディスカッションが特に実証的証拠が提供されている際は、その証拠ときちんと絡み合っている。そして記事の本文以外にも、そのトピックに密に関係していて、しかもアーバンリサーチャーにとって現在重要な記事や他の情報等を引用している文献にも、質の高さが見て取れる。
- イントロダクションセクションは、（必ずしもイントロダクションそのものとは限らないが）その論説に対し自分の記事がどういう位置付けかを示し、どのように自分の記事が新しい見解を提供しているか、どんな問題にたいして回答をだそうとしているかを説明していなければならない。また読者のために、この先のセクションの紹介をイントロダクション内でするのも役に立つ。
- 問題に対するより広い、インターナショナルな概念的ディベートの理解、またディベートが既に発表された記事内でどう表現されてきたか、新しい証拠を確立するために用いられた筆者の手法、この研究の発見や結果、この研究がどのようにこの分野の既存のディベートに新しいアイデアを付け加えているか等を明確に示唆することにより、読者をリードする論理的な構成になっている。これら全ての面をカバーするスタンダードな方法はないが、明確にセクションを順序立てて、理路整然とした議論になっていなければならない。
- 結論または結論のセクションで、発見したことのまとめや更なるリサーチが必要だと提案するのは避けるべきだ。むしろ熟考的に、たとえば論説の根底にある想定に回帰し、筆者が書いた議論をもとにその想定がどのように問われるべきか、そして/または記事内で採用した方法論について注意すべき点に触れるべきだ。結論がどう導き出されたとしても、それは記事の重要な部分であり、議論に対し何か新しいものを提供していなければいけない。

どんな記事が編集者や査読者にリジェクトされるか

どんな記事がリジェクトされる傾向にあるかはすでに定義した — アーバンについての内容が十分に書かれていない、あるいは研究課題が明確に位置付けされておらず、発展していないこと等が主な問題だ。

実際にジャーナルに投稿されて査読に及ばないとされたものの共通問題点は下記である。

- あるケーススタディーをベースに書かれており、全体的に実証的なことばかりで、その問題がより広範囲に渡るディベートや論説内に位置づけされていない。
- 既存の論説内に自分の記事をきちんと位置づけしているものの、記事の後半で再度それに回帰し、この記事が担う新しい貢献について強調することが欠けている。
- 説明書きが多すぎて分析がなく、ゆえに問題を批評的に議論していない。
- 内容の殆どが論説のレビューばかりで十分な新しい見解が加えられていない。
- 世界の全地域の幅広いアーバンリサーチコミュニティの読者が十分な興味を持たず、重要性を感じられない。

投稿から掲載までの流れ

記事が投稿された時点より、ジャーナル側が行うプロセスの概要

- 全ての投稿された記事はまず編集長に読まれる。編集長は記事がジャーナルのスコープ内であるかどうか、十分な新しいアイデアが提供されているかどうか、掲載可能なクオリティーであるかどうかを判断する。
- 上記を通過したものは、ジャーナル編集者のうちの一人に割り当てられ、編集者は査読に送るかどうかを検討する。
- 編集者がその記事が否定的なレビューばかり受けそうだが、可能性があると感じたものは、筆者にどのように書き直すかアドバイスを「撤回&再提出」を依頼しうる。
- 投稿してからすぐ1～2週間以内に、記事が最初のハードルを通過、掲載に適している可能性があり、査読されるかどうか知らされる。（あまりないケースだが、書き直しが必要だと連絡がいくこともある。）
- 記事は三人の査読者に送られる。（批判的論評の場合は二人）快諾してくれる査読者を確保するのに時間を要し、フィードバックが返ってくるのを待たなければいけない事もある。だが多くの査読者は概ね期限内にコメントを返してくれる。
- 査読者よりフィードバックが得られたら編集者により検討され、まとめられる。記事はアクセプト、または要マイナー修正、要メジャー修正、修正&再提出、リジェクトのどれかに分けられる。最初の提出後にアクセプト、または要マイナー修正とされることは滅多にない。トップクラスの学者でさえ最初の提出で要メジャー修正または修正&再提出となる。実際には査読されて最終的に掲載された記事の90%以上が要メジャー修正、または修正&再提出となっている。
- この時点で記事が査読者と編集者の判断でリジェクトされていないので、筆者は投稿された記事の進展状況に喜んで良いだろう。殆どの記事がいくらかの修正を必要とするという事実を踏まえ、投稿された記事が掲載されるチャンスはかなり大きい。記事を満足のいくように修正することは最優先事項でなければならない。

- 記事を再提出するまでに筆者に六か月の期限が与えられる。再提出する上で大事なことは、査読者に指摘されたそれぞれの点、問題に対してどのように対応したかを明確に記載することだ。一番良い方法は表を作って左側の欄に査読者のコメントを書き、そしてその右側の欄にどのように対応したかを明記することだ。もちろん査読者のコメントに同意しなくても良いが、その際はどのようにしてなのかを説明することが大切だ。記事で修正された部分は、変更履歴の記録機能を利用したり、色を変える等して修正部分がわかるようにしなければならない。
- 再提出された記事は同じ査読者に再査読のため、上記のカテゴリーに再度分類するために送り返される。またこれに暫く時間がかかることもある。修正された記事でもまだメジャー修正が必要とされることは珍しくない。再提出後の記事がリジェクトされることも有り得る。特に二回目のラウンド後にまた修正&再提出とクラス分けされた記事はリジェクトの可能性が高い。
- 願わくは投稿された記事が最終的にアクセプトされ、ここでジャーナルの出版会社にフォーマットのために手渡される。最終ミス確認のためのプルーフイングが筆者に送られる。
- 記事がアクセプトされると、筆者はコピーライトをジャーナルに帰属させる寄稿者合意書に署名するよう求められる。筆者は記事の最終掲載版を公のウェブサイトに掲載してはならない。
- 記事はまずオンラインで掲載され、数か月後に印刷物に掲載される。筆者はこの間に記事のキーポイント、見解、サマリーをブログに書くように勧められる。ブログに書くことによってより記事に興味をもたれ、ダウンロードに繋がるので、ブログを書く価値は大いにある。当ジャーナルは採用された記事のプロモーションのためにツイッターも使っている。（中国の記事の場合は WeChat）

まとめ

国際ジャーナルに掲載される記事の準備は長くて困難な旅かもしれない。筆者はしばしば途中で諦めそうになるだろう。しかし査読者のコメントに対応したり、記事を書き直したりするのはどの筆者にとっても大切な学習になり得る。よく見直しされた記事は必ず、初期のものより遥かに素晴らしいものになる。

Urban Studies ジャーナルの見地からすると、より広く世界中の筆者から投稿を得られること、そして従来より更に広い背景からのリサーチ、概念的発展をもとにしたアーバンスタディーズのディベートを発展させることは、多大なメリットがある。これによりアーバン分野における学問をより強化し、向上させることができるのだ。

2019年1月